四万十楽舎カヌーツーリングマップ

四万十楽舎下出発～口屋内沈下橋着　5.2km

四万十川の名前の由来

「四万十川」が最初に使われたのは500年以上前に書かれた「土佐物語」のなかです。「土佐物語」の著者・吉田孝世は、長宗我部元親に失脚させられた一条氏を憂い、「三途の川」の意味もある「渡川」に、永遠の至福の意味のある「四萬（万）」をつけて「四萬渡川」と造語したといわれています。（四万十川の名前の由来は他にもいくつかあります。）

四万十川はなぜ緑色？

川では水の深さによって、人の見える光（可視光線）の入る量及び散乱量が違います。水深が深くなると人の見える光（可視光線）が水中に進入して赤色系は水に吸収され青色系が散乱して緑から青く見えてきます。

岩間沈下橋

岩間の沈下橋は四万十川のゆったりとした流れとともにあって、絶好の撮影ポイントです。

二重の滝

瀬とトロ場

川には流れが速くて水深の浅い場所（瀬）と流れが遅くて深い場所（淵）があります。

瀬は浅いため、日光が川底まで届き石に付着する藻類がたくさん育ちます。これを食べる水生昆虫が集まり魚の餌場にもなります。一方、淵は流れが緩やかで深いため、魚の休憩所にもなります。鳥や人間に追われたときは逃げ場所になります。またコイなどの大型の魚の棲みかにもなっています。

※淵は「トロ」とも言われます。

草木の競争と共生

草木も実は自分の居場所を確保し、子孫を残していくために時には競争し、時には共生の関係を作って生きています。四万十川は雨が降ると流量が非常に多くなり、大水となります。河岸では、その水と上手に付き合える草木が生き延びてきました。

かよう大橋

平成10年に完成した流域唯一の斜張橋です。カヌー下りへの配慮から橋脚を1本にしました。

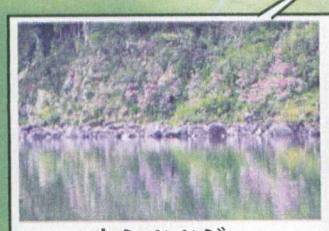
せん入蛇行

四万十川はゆったりと大きく蛇行しながら流れています。四国山地ができる前まで、四万十川は平野を自由に蛇行していて、そのまま地盤が隆起したと考えられています。そのような蛇行形態を「せん入蛇行」といいます。

岩場ダイブ

山林と林業

豊かな川を支えているのが豊かな森です。四万十川流域面積の85%は山林です。ここでは古くから林業や炭焼きが盛んに行われていました。戦後には造林を進め、山林の70%はスギ・ヒノキといった針葉樹を中心とした人工林です。ただ、近年では山林の荒廃も問題になっています。



キシツツジ

屋内沈下橋

沈下橋の歴史は古くはありません。ほとんどが戦後に作られました。口屋内の沈下橋も昭和30（1955）年にできました。橋のすぐ下流にはきれいな黒尊川が合流しています。

魚、エビ、カニと漁業

魚の種類が豊富な四万十川ではアユの他に、ウナギ、ツガニ、テナガエビが獲れます。それらを漁獲する方法も様々で、柴漬け漁（ウナギ、テナガエビ）、コロバシ漁（ウナギ、テナガエビ）、カナツキ漁（コイなど）、イタチ漁（ウグイ）、火振り漁（アユ）などの伝統漁法があります。このなかには今でも行われている漁法もあります。